

## ENDCOREsを用いたコミュニケーション・スキルの測定

—現状と課題—<sup>1</sup>

内藤 健一

The measurement of communication skills using ENDCOREs: Status and current issues

Kenichi NAITOH

### Abstract

The "ENDCOREs" scale (Fujimoto & Daibo, 2007) is frequently used for measuring communication skills. It comprises six sub-scales: Expressivity, Assertiveness, Decipherer ability, Other Acceptance, Self-control, and Regulation of Interpersonal Relationship. Each sub-scale contains four question items. Moreover, each sub-scale has high internal consistency and concurrent validity. Previous studies that used ENDCOREs were divided into three categories. The first category included studies that examined differences in scores on the ENDCOREs between sexes, among grades, and so on. The second category included studies that examined the relationship of scores on the ENDCOREs to scores on other scales. The third category included studies that examined changes in scores on the ENDCOREs before and after lectures. The review of previous studies that used the ENDCOREs revealed the following: 1) In the case of undergraduate students (except medical students), scores on some sub-scales improved with increase in age. 2) It is necessary to compare a control group with an experimental group to examine whether scores on the ENDCOREs change before and after lectures. 3) It is necessary to examine the predictive validity of the ENDCOREs scale using medical university students.

**Key words** : communication skills, ENDCOREs, questionnaire method

**キーワード** : コミュニケーション・スキル, ENDCOREs, 質問紙法

コミュニケーション・スキルとは、例えば余語 (1999) によれば、自分の考えや感情を効果的に他者に伝達したり、他者の考えや感情を敏感にとらえて応答したりするスキルである。

この、コミュニケーション・スキルを、複数の質問項目から成る尺度で測定した研究を、「コミュニケーション・スキル」と「尺度」をキーワードとしてCiNiiで検索したところ<sup>2</sup>、(重複を除いて) 84件ヒットした (2019

年5月20日)。84件の中から情報誌 (日経ものづくり) 1件、レビュー論文1件を除いた82件について、コミュニケーション・スキルの測定にどのような尺度が用いられているのかを調べた。その結果、ENDCOREsが20件で最も多く、KiSS-18が15件でその次に多かった。

### ENDCOREsとは

藤本・大坊 (2007) によれば、コミュニケーション・スキルという概念を整理するために、既存の11の尺度を構成する因子について、KJ法の手続きにより、第1著者と、社会心理学を専攻する院生である研究協力者が分類をおこなった。その結果、自己統制に関する因子、表現力に関する因子、解読力に関する因子、自己主張に

1 本論文における引用法、及び文献記載方法は、日本心理学会が発行している「執筆・投稿の手びき (2015年改訂版)」の規定に従っている。

2 「コミュニケーション・スキル」と「質問紙」で検索したところ、(重複を除いて) 58件ヒットした (2019年5月20日)。ヒットした58件を調べた結果、ENDCOREsが11件で最も多く、KiSS-18が10件でその次に多かった。

関する因子, 他者受容に関する因子, 関係調整に関する因子という6種類のカテゴリーを得た。ENDCOREとは, 表現力と自己主張に共通する ENCODE・解読力と他者受容に共通する DECODE・自己統制の CONTROL・関係調整の REGULATIONの頭文字を取ったものである。

スキルを階層構造として捉えた“スキルの扇”(藤本・大坊, 2007 Figure 1)において, 自己統制は最下位に位置付けられ, その上に表現力と解読力, さらにその上に自己主張と他者受容, そして最上位に関係調整が位置付けられている。また, これらの6因子は, 理論的に, 基本スキル(自己統制・表現力・解読力)と対人スキル(自己主張・他者受容・関係調整), 表出系(表現力・自己主張), 反応系(解読力・他者受容), 管理系(自己統制・関係調整)に分類されている。

藤本・大坊(2007)は, これら6つの因子を6つのメインスキルとした上で, それらを構成する4種類のサブスキルを設定し, 各サブスキルに関する質問項目を一つずつ用意し, 24項目から成る尺度 ENDCOREs(末尾のsは複数であることを表す)を作成した。この ENDCOREs(「普段のコミュニケーション場面におけるあなたの行動について回答してください」と教示した後, 各項目についてかなり得意(7), 得意(6), やや得意(5), ふつう(4), やや苦手(3), 苦手(2), かなり苦手(1)の7件法で回答), 及び既存の尺度(PEA及びPDAの日本語版, ACTの日本語版, ENDE2, SSIの日本語版, ICQの日本語版, KiSS-18, JICS, RSMSの日本語版)などを用いて, 2004年4月下旬から7月下旬までの3か月間, 計233名(男性154名; 19.56 ± 1.14歳, 女性79名; 19.91 ± 2.83歳)の大学生を対象に調査をおこなった。その結果, 各メインスキルの内的整合性は, 自己統制( $a = .68$ ), 表現力( $a = .89$ ), 解読力( $a = .93$ ), 自己主張( $a = .84$ ), 他者受容( $a = .84$ ), 関係調整( $a = .82$ )と, 自己統制以外は高かった<sup>3</sup>。また, 共分散構造分析の結果から, メインスキル間に, あらかじめ想定していた関係性と階層性を有することが確認された。さらに, ENDCOREsを構成する各メインスキルは, それぞれ内容的に対応する既存の尺度の因子と関連していた。

3 大学生2184名(男性1209名, 女性969名, 性別不明6名)を調査対象者とした藤本(2013)では, 自己統制( $a = .67$ ), 表現力( $a = .83$ ), 解読力( $a = .90$ ), 自己主張( $a = .80$ ), 他者受容( $a = .83$ ), 関係調整( $a = .78$ )であった。また, 看護師674名(男性83名, 女性588名, 無回答3名)を調査対象者とした杉山・比嘉・田中・山田(2015)では, 自己統制( $a = .74$ ), 表現力( $a = .88$ ), 解読力( $a = .91$ ), 自己主張( $a = .86$ ), 他者受容( $a = .92$ ), 関係調整( $a = .87$ )であった。

## ENDCOREsを用いた先行研究

「コミュニケーション・スキル」と「尺度」をキーワードとして検索した結果抽出された, ENDCOREsを用いた先行研究20件の概要を, Table 1~3に示した。各表において「その他の使用尺度」は ENDCOREs以外の尺度を表す。また, 「分析内容」は ENDCOREsに関わるもののみを記載した。

### タイプI: ENDCOREsの得点の, 属性による違いを分析

ENDCOREsの得点の, 属性による違いを分析した先行研究(タイプI)の概要を, Table 1に示した。千葉他(2017)では, 自己主張のサブスキルである柔軟性で1年生(4.7) > 3年生(4.0), 他者受容のサブスキルである共感性で1年生(5.8) > 3年生(5.1), 関係調整のサブスキルである関係維持で1年生(5.9) > 4年生(5.3)となった。また, 対人スキルで1年生(5.2) > 4年生(4.6), 管理系スキルで1年生(10.3) > 4年生(9.1)となった。1年生に比べて, 3年生ないし4年生の自己評定値が低くなった理由として, 千葉他(2017)は, 関わる相手や頻度など学内と大きく異なる状況(3年次の評価実習, 4年次の総合臨床実習)において, 自分が思っているほど, 実際はうまくできないことで, 自身のスキルに対する自己評価が低くなったのではないかと考察している。岩月他(2013)では, 解読力以外のメインスキルで男性 > 女性となった。学年別比較では, 表現力以外のメインスキルで, 2年生 > 4年生となった。倉元・大坊(2012)では, 解読力で女性(4.78) > 男性(4.46)となった。年齢別比較では, 対象者の年齢を18歳, 19歳, 20歳, 21歳以上の4つに分類した上でメインスキルごとに比較したところ, 自己統制で21歳以上(4.82), 19歳(4.78) > 18歳(4.40)(20歳は4.65で, 他の年齢と有意差なし), 自己主張で21歳以上(4.41) > 18歳(3.93), 19歳(3.83), 20歳(3.78)となった。女性が男性よりも自己評定値が高かった理由として, 倉元・大坊(2012)は, 女性のほうが, 対人感受性に優れている(大坊, 1998)ことを挙げている。自己統制, 自己主張において21歳以上が他の年齢よりも自己評定値が高くなった理由として, 21歳という年齢は大学3~4年生にあたり, 多くの学生が就職活動などを通して社会と触れ合うようになる。また, クラブやアルバイト先ではより責任のある役割を任せられることもしばしばである。このような経験を通じて, 集団の中で自己を管理し, 表現することを獲得していくか

Table 1 ENDCOREs を用いた先行研究の概要 (タイプ I)

文献	対象者	対象者の年齢	その他の使用尺度	分析内容
平工・小林・北・中山・小谷 (2018)	大学生	—	8項目の評価観点, 4つの評価尺度から成るルーブリック	ENDCOREsの各因子の, ルーブリックを用いた授業と用いていない授業の違い
千葉・佐藤・浅田 (2017)	作業療法専攻に在籍する大学生1~4年生155名 (男性72名, 女性83名)	20.9±3.3	—	ENDCOREsの各サブスキル, 全体, 基本スキル, 対人スキル, 各系スキルの, 1~4年生の間の違い
桑原・石原・内山・小島 (2016)	看護師233名 (新人38名, レベル I 120名, レベル II 66名, レベル III 9名)	—	—	ENDCOREsの基本スキルと対人スキルについて, 新人・レベル I 群と, レベル II・III 群の比較, 各因子, 各サブスキルの新人・レベル I 群と, レベル II・III 群の比較
千葉・佐藤・浅田 (2015)	作業療法学生, 言語聴覚学生1, 2年生110名 (男性51名, 女性59名; 学生群), 臨床実習指導者84名 (男性47名, 女性37名; 指導者群)	学生群19.8±3.2, 指導者群36.5±8.9	—	ENDCOREsの各因子, 基本スキル, 対人スキル, 全項目得点の, 学生群と指導者群の比較, 各サブスキルの, 学生群と指導者群の比較, 表出系スキル, 反応系スキル, 管理系スキルの, 学生群と指導者群の比較, 得点パターンによるクラスター分類, 及び学生群, 指導者群との関係性, 各群の表出系, 反応系, 管理系スキル間の比較
岩月・木村・文野 (2013)	理学療法学生1~4年生計561名 (男性377名, 女性184名)	—	成人キャリア尺度, 個人志向性・社会志向性PN尺度	ENDCOREsの各因子の, 男女別, 学年別比較
倉元・大坊 (2012)	男女大学生・大学院生287名 (女性208名, 男性76名, 性別不明3名)	19.83±3.30	—	ENDCOREsの因子分析, 各因子のα係数, ENDCOREsの各因子の, 男女別, 年齢別比較, 相互作用時に会話をする相手に対して求めるスキルの程度 (ENDCOREsを用いて; 287名のうち131名に回答させた) との比較など

らではないかとしている。

千葉他 (2015) では, 他者受容で, 学生群 (5.36) > 指導者群<sup>4</sup> (5.06) となった。また, 他者受容のサブスキルである友好性, 譲歩, 他者尊重で, いずれも学生群 (順に 5.41, 5.34, 5.36) > 指導者群 (順に 5.13, 4.96, 5.08), 関係調整のサブスキルである関係重視, 関係維持で, いずれも学生群 (順に 5.30, 5.44) > 指導者群 (順に 4.99, 4.98), 反応系で学生群 (10.25) > 指導者群 (9.60) となった。学生群に比べて指導者群の自己評定値が低くなった理由として, 千葉他 (2015) は, 学生群は日常的に関わりのある親しい相手との反応から自分のコミュニケーション・スキルを評価しているのに対して, 指導者群は, 専門職としての関わりの中で, 立場の異なる相手とのコミュニケーションの難しさの理解を基に評価しているためとしている。

桑原他 (2016) では, 看護師のクリニカル・ラダー別, ここでは新人・レベル I 群と, レベル II・レベル III 群<sup>5</sup> の, 基本スキル, 対人スキル, 6つのメインスキルについて, 自己評定値が比較された。その結果, 基本スキル, 対人スキルに有意差は見られなかった。メインスキルについては統計的検定が実施されていないものの, 表現力と自己主張において, レベル II・レベル III 群のほうがやや高かった。

4 指導者群の職種は作業療法士 58 名, 言語聴覚士 26 名で, 経験年数は 11.6 ± 6.7 年であった。

5 各レベルの年代割合は, 新人では 20 代が 74%, レベル I では 30 代が 46%, レベル II では 30 代が 44%, レベル III では 41 歳~45 歳が 56% であった。

平工他 (2018) では, ルーブリックを用いた授業のほうが, 用いない授業よりも, 6つ全てのメインスキルの自己評定値が高くなっていた。

### タイプ II : ENDCOREs と, 他の尺度の関連を分析

ENDCOREs と, 他の尺度の関連を分析した先行研究 (タイプ II) の概要を, Table 2 に示した。

二本松・若島 (2018) は, 攻撃的な笑いへの反応項目 25 項目 (1: あてはまらない~5: あてはまるの 5 件法) に対する調査対象者の回答について, 回答に偏りの見られた 3 項目を除いた上で, 最尤法・プロマックス回転による因子分析をおこなった。その結果, 「協調反応」(「便乗して自虐的に振る舞う」など 7 項目;  $a = .86$ ), 「否定・拒否反応」(「面白くない時は「面白くない」と伝える」など 4 項目;  $a = .73$ ), 「曖昧反応」(「その笑いに対し, ぐっとこらえ我慢する」など 6 項目;  $a = .68$ ) の 3 つの因子が得られた。こうして作成された, 攻撃的な笑いへの反応尺度の併存的妥当性を検討するために, 各因子と, ENDCOREs におけるメインスキル, 合計との相関係数が計算された。その結果, 「協調反応」は, 関係調整と弱い正の相関が見られ ( $r = .204, p < .01$ ), 他者受容, 合計とも, 有意傾向だが弱い正の相関関係にあった ( $r = .128, p < .10, r = .142, p < .10$ )。「否定・拒否反応」は, 表現力, 自己主張と弱い正の相関を示していた ( $r = .266, p < .001, r = .287, p < .001$ )。「曖昧反応」に関し

Table 2 ENDCOREs を用いた先行研究の概要 (タイプII)

文献	対象者	対象者の年齢	その他の使用尺度	分析内容
前田・佐藤 (2018)	大学生309名 (男性199名, 女性110名)	20.98±1.80	AQ日本語版, 成人用メタ認知尺度	ASD傾向とメタ認知がコミュニケーション・スキルに与える影響を, 構造方程式モデリングで解析
二本松・若島 (2018)	大学生・大学院生183名 (男性93名, 女性88名, 性別不明2名)	20.21±2.25	攻撃的な笑いへの反応尺度, ユーモア態度尺度	攻撃的な笑いへの反応尺度の各下位尺度と, ENDCOREsの各因子, 全体との関連
真鍋・當目 (2018)	看護師914名 (男性89名, 女性825名)	10歳代~60歳代	看護師ヒューマンスキル尺度 (試案), KiSS-18	ENDCOREsの各因子と, 看護師ヒューマンスキル尺度 (第一版)の全体, 下位尺度との関連
松本他 (2016)	A大学看護学科1年次生30名	—	エゴグラム, 日常生活スキル尺度	ENDCOREsの各因子, 各系と, エゴグラムにおける5つの下位尺度との関連
杉山他 (2015)	看護師674名 (男性83名, 女性588名, 無回答3名)	35.0±11.2	援助的コミュニケーションスキル測定尺度 (TCSS), スピリチュアリティ評定尺度A (SRS-A), 多次元共感性尺度 (MES)	ENDCOREsの全体, 及び各因子のα係数, 援助的コミュニケーションスキルに, 基礎的コミュニケーションスキル (ENDCOREs), 私的スピリチュアリティ, 共感性がどのように関連するかについて, 共分散構造分析
針本他 (2015)	看護師407名 (女性371名, 男性36名)	—	自己受容尺度	自己受容尺度合計得点を目的変数, ENDCOREsの各因子を説明変数とした重回帰分析, PNS (パートナーシップ・ナーシング・システム) に関連した研修会参加経験, PNSの実践経験の有無による, ENDCOREsの違い
奈良他 (2014)	鍼灸専門学校生, 鍼灸専攻大学生, 鍼灸・柔整免許保持者, 計443名 (男性245名, 女性198名)	男性29.7±10.9, 女性28.2±10.0	STAI日本語版特性不安尺度, 医療コミュニケーション・スキル質問票	ENDCOREsの各因子のα係数, ENDCOREsの各因子と, 医療コミュニケーション・スキル尺度の下位因子との関連, ENDCOREsの各因子を独立変数, 医療コミュニケーション・スキル尺度の各下位因子を従属変数とした重回帰分析
藤本・大坊 (2007)	(ENDCOREsとは, の項を参照.)			

ては, 自己主張と弱い負の相関を示していた ( $r = -.151, p < .05$ )。この結果から, 笑いを一緒になって増長させるような反応, もしくは笑いをとることができて満足しているような反応をする人 (≡攻撃的な笑いに対し「協調反応」を多くする人) は, 人間関係を良好に維持することを得意とすること (関係調整), 攻撃的な笑いの対象になって不快だと感じた際に, その思いを伝えるという反応を選択すること (≡「否定・拒否反応」を多くする人) と, 自分の考えや気持ちを表現すること (表現力) や, 自分の意見や立場を受け入れてもらう (自己主張) といった能力が関係していること, 非主張的で雰囲気維持するような反応をする人 (≡「曖昧反応」を多くする人) は, 自分の意見や立場を受け入れてもらうことを苦手としていること, が明らかとなった。

奈良他 (2014) は, ENDCOREs をモデルに<sup>6</sup>, 20項目7件法 (論文に記載はないが ENDCOREs と同じ反応選択肢を用いていると思われる) から成る医療コミュニケーション・スキル質問票を作成・実施し, 調査対象者の回答について因子分析をおこなった。その上で, 因子負荷量が .40 に満たない項目, 因子負荷量 .40 以上が複数の因子で見られた項目を除外した上で, 再度因子分析をおこなった。その結果, 「患者受容と自己統制」 (ENDCOREs の自己統制3項目, 他者受容3項目, 関係調整1項目の計7項目;  $\alpha = .892$ ), 「患者への適切な説明」 (ENDCOREs の自己表現4項目, 解読力1項目,

関係調整1項目の計6項目;  $\alpha = .877$ ), 「患者の心情理解」 (ENDCOREs の解読力3項目;  $\alpha = .872$ ) の3つの因子が得られた。こうして作成された, 医療コミュニケーション・スキル質問票の併存的妥当性を検討するために, 因子分析の結果得られた3つの因子と, ENDCOREs の6つの因子の間の相関係数を算出した。その結果, 全ての組み合わせで, 有意な正の相関が見られた。また, 3つの因子を従属変数, ENDCOREs の6つの因子を独立変数とした重回帰分析の結果, 「患者受容と自己統制」では, 他者受容 ( $\beta = .472$ ), 自己統制, 解読力 (影響力が大きい順; 以下同様) がそれぞれ有意であった。「患者への適切な説明」では, 自己主張 ( $\beta = .416$ ), 解読力, 関係調整, 自己統制, 表現力がそれぞれ有意であった。「患者の心情理解」では, 解読力 ( $\beta = .540$ ), 関係調整, 表現力がそれぞれ有意であった。以上の結果から, 医療コミュニケーション・スキル質問票の併存的妥当性が, 概ね認められたとしている。

真鍋・當目 (2018) は, 35項目から成る看護師ヒュー

6 例えば「患者受容と自己統制」の質問項目「患者との関係を良好な状態に維持するように心がけること」は, ENDCOREs の質問項目「人間関係を良好な状態に維持するように心がける」を, 「患者への適切な説明」の質問項目「患者に自分の考えを論理的に筋道を立てて説明すること」は, ENDCOREs の質問項目「自分の主張を論理的に筋道を立てて説明する」を, 「患者の心情理解」の質問項目「患者の気持ちをしぐさや気配から正しく読みとること」は, ENDCOREs の質問項目「相手の気持ちをしぐさから正しく読みとる」を, それぞれモデルにしている。



マンスキル尺度<sup>7</sup>（試案）（看護師として仕事をする時の状況について、7（非常に当てはまる）～1（全くあてはまらない）の7件法）を作成・実施し、共通性が.4未満、因子負荷量.35未満などの項目を除外しながら因子分析（主因子法・プロマックス回転）を繰り返し、最終的に3因子15項目を抽出した。第1因子は「知識的組織理解」（私は、病院の理念に基づいて看護をしているなど、5項目； $a = .829$ ）、第2因子は「積極的自己開示」<sup>8</sup>（私は、看護をするうえで、自分の考えを積極的に伝えるなど、6項目； $a = .853$ ）、第3因子は「協働的問題解決」（私は、自分と意見が異なる看護スタッフとは話し合っ解決しているなど、4項目； $a = .869$ ）と命名された。この尺度の併存的妥当性を検討するために、各因子、尺度合計得点と、ENDCOREsの各因子（ただしデータ収集時に脱落のあった関係調整を除く）との相関係数を算出した。その結果、全ての組み合わせで有意な正の相関が見られ、中でも、「知識的組織理解」では自己統制と、「積極的自己開示」では表現力、自己主張と、「協働的問題解決」では表現力、自己主張と、そして尺度合計得点では表現力、自己主張と、.4以上の相関が見られた。これらの結果について、積極的に自分の考えを伝える「積極的自己開示」は、表現力や自己主張の概念と類似していること、人と協働するためには、自分の意見を主張する自己主張や、問題解決においてともに相手を巻き込み動かすために表現力の概念が類似していること、組織理解は、組織の一員として自分の立場を考えることにつながる。そのため、組織の一員として、自己統制の概念が類似していること、以上より看護師ヒューマンスキル尺度の併存的妥当性があると判断した、としている。

松本他（2016）は、エゴグラム（新版TEG II）における5つの下位尺度（CP, NP, A, FC, AC各10項目：はい（2点）、どちらでもない（1点）、いいえ（0点）の3件法でそれぞれ0～20点の範囲）の尺度得点と、ENDCOREsの6つのメインスキル、3つの系の自己評定値との順位相関係数を算出した。その結果、CP（批判的な親）では全ての項目で、.4以上の有意な正の相関が見られた。NP（養育的な親）では反応系、解読力、他者受容、管理系、関係調整、自己統制で有意な正の相関が見られ、自己統制と解読力以外では.4以上の相関

であった。A（大人）では自己主張とのみ有意な正の相関（.33）が見られた。FC（自由な子ども）では自己統制以外で有意な正の相関（.30～.51）が見られた。AC（従順な子ども）では表出系（-.39）、自己主張（-.44）、表現力（-.25）で有意な負の相関が見られた。CPとの相関について、表出系には正しいことを主張する面、反応系には相手の考えや発言を読み取り、共感する面、管理系は善悪判断や人間関係を良好に保つ面があり、これらはCPの正義感、義理堅さ、道徳的、相手の考えを正しく読み取り、かつ相手に受け入れられるように自分の意見を主張し、自らをコントロールする力とも重なるためとしている。NPとの相関について、NPは他者理解や他者との関係性のコントロールが行動の基本となることから、表出系よりも反応系、管理系との関連が示されたとしている。Aとの相関について、論理性や客観性が、自己主張と共通した可能性があるとしている。FCとの相関について、FCの活動的で、感情を率直に表現する点が表出系と通じ、人見知りが少ない点や、まわりを楽しくさせる点が、相手に友好的な反応系や、対立を好まない関係調整との関連を生じさせたとしている。ACとの相関について、自分の考えや気持ちを表現する力は、他者に流されやすく、指示されやすい受身的なACにとっては苦手なスキルと考えられるとしている。

針本他（2015）は、自己受容尺度<sup>9</sup>合計得点を目的変数、ENDCOREsの各因子を説明変数とした重回帰分析をおこなった結果、自己統制（ $\beta = .311$ ）、及び表現力（ $\beta = .156$ ）で、有意であった。また、PNS<sup>®</sup>に関連した研修参加経験のある看護師のコミュニケーション・スキル得点<sup>10</sup>（ $101.5 \pm 14.8$ ）は、参加経験のない看護師の得点（ $96.9 \pm 14.7$ ）よりも有意に高かった。さらに、PNS<sup>®</sup>実践経験のある看護師の表現力の得点（ $3.80 \pm 0.83$ ）が、経験のない看護師の得点（ $3.57 \pm 0.91$ ）よりも有意に高かった。重回帰分析の結果から、感情コントロールしながら自分の考えや気持ちを言葉やしぐさで表現することで、自己受容が高まるのではないかとしている。

前田・佐藤（2018）は、ASD（自閉スペクトラム症）傾向とメタ認知がコミュニケーション・スキルに与える影響を検討するために、構造方程式モデリングによる解

7 ヒューマンスキルとは、真鍋・當日（2018）によれば対人関係能力のことである。

8 この因子は他の2つの因子とは異なり、コミュニケーション・スキルとの関係が深いと考えられるが、看護師ヒューマンスキル尺度を、コミュニケーション・スキルの測定に用いられていた尺度には含めなかった。

9 針本他（2015）は、PNS<sup>®</sup>マインドの指標として、本尺度を使用している。PNS<sup>®</sup>マインド（パートナーシップ・マインド）とは、他者に依存するのではなく、1人のプロフェッショナルとして自らの頭で考え、自らを助く心の持ち様である。PNS<sup>®</sup>（パートナーシップ・ナーシング・システム）を成功に導くために、PNSマインドを理解し実践することが重要だという（橋、2014）。

10 針本他（2015）には記載がないが、ENDCOREs7件法24項目の合計得点を指すと思われる。

析をおこなった。その結果、ASD傾向からメタ認知に対して有意な負のパス ( $\beta = -.53$ )、ASD傾向からコミュニケーション・スキルに対して有意な負のパス ( $\beta = -.83$ )、メタ認知からコミュニケーション・スキルへ有意な正のパス ( $\beta = .16$ )が見られた。この結果より、ASD傾向が高い大学生は、コミュニケーション・スキルとメタ認知がともに低くなること、メタ認知が低くなるとコミュニケーション・スキルも低くなることから、ASD傾向の大学生が抱えるコミュニケーションの問題にはメタ認知が介在している可能性があることが示唆されるとしている。また、ASD者のメタ認知機能についての先行研究から、コミュニケーション・スキルに影響を及ぼすメタ認知の要素として、モニタリングが重要であると指摘している。

杉山他 (2015) は、援助的コミュニケーションスキルに、基礎的コミュニケーションスキル (ENDCOREs)、私的スピリチュアリティ、共感性がどのように関連するかについて、共分散構造分析をおこなった。その結果、私的スピリチュアリティから基礎的コミュニケーションスキルに対して有意な正のパス ( $\beta = .32$ )、私的スピリチュアリティから共感性に対して有意な正のパス ( $\beta = .40$ )、共感性から基礎的コミュニケーションスキルに対して有意な正のパス ( $\beta = .57$ )、そして、基礎的コミュニケーションスキルから援助的コミュニケーションスキルに対して有意な正のパス ( $\beta = .45$ )が見られた。私的スピリチュアリティの、共感性に対する正の影響について、私的スピリチュアリティの下位尺度の一つである「意気」(何かを求めそれに関係しようとする心の持ち様)、看護師の場合で言えば、看護師として患者に関わっていくようにすることが、患者を共感していく過程で根底を支える役割を担っていることを示唆しているのではないかとしている。私的スピリチュアリティの、基礎的コミュニケーションスキルに対する正の影響について、ENDCOREsにおける表出系は、自己の中からの能動的なスキルが求められることから、私的スピリチュアリティの「意気」との関連が、ENDCOREsにおける解釈系は、他者を受容するスキルも含まれていることから、コミュニケーションに関する自己への志向性を含んでいるとした上で、私的スピリチュアリティのもう一つの下位尺度である「観念」(自分自身やある事柄に対する感じまたは思い)との関連が、そして、ENDCOREsにおける管理系は、自己と他者への両方向へのマネジメントをするスキルが求められることから、私的スピリチュアリティの「観念」「意気」との関連が、考えられるとしている。共感性の、基礎的コミュニケーションスキルに対する正

の影響について、共感をおこなっていくには、相手からの表現を理解し、理解したことを相手に向けて表現する必要がある。つまり、共感のプロセスの中で、理解する力、表現する力、マネージメントする力である基礎的コミュニケーションスキルが影響を受けているのではないかとしている。基礎的コミュニケーションスキルの、援助的コミュニケーションスキル<sup>11</sup>に対する正の影響について、援助的コミュニケーションスキルが、刺激に反応するスキル、内面から表出するスキル、マネージメントするスキル、すなわちENDCOREsで測定される基礎的コミュニケーションスキルを基盤としているためとしている。

### タイプⅢ：講義や実習の前後の、ENDCOREsの得点の変化を分析

講義や実習の前後の、ENDCOREsの得点の変化を分析した先行研究(タイプⅢ)の概要を、Table 3に示した<sup>12</sup>。

向出 (2018) では、ダンスの授業 (6回) 前後で、表現力、他者受容、関係調整それぞれの得点が有意に上昇していた (表現力: 授業前 2.70, 授業後 3.18, 他者受容: 授業前 3.38, 授業後 3.71, 関係調整: 授業前 3.25, 授業後 3.52; 向出 (2018) では「とてもあてはまる」を4、「だいたいあてはまる」を3、「あまりあてはまらない」を2、「まったくあてはまらない」を1とした4件法で実施しているので注意)。表現力、他者受容、関係調整のサブスキルについて、ダンスが好き・嫌い×授業前後の2要因分散分析をおこなった結果、他者受容のサブスキルである友好性、関係調整のサブスキルである関係維持で群の主効果 (ダンスが好き > ダンスが嫌い)、表現力のサブスキルである表情表現、他者受容の全てのサブスキル、関係調整の全てのサブスキルで時期の主効果 (授業前 < 授業後)、表現力のサブスキルである言語表現、身体表現、情緒伝達で群と時期の交互作用が見られた。単純主効果の検定結果が記載されていないが、グラフ

11 援助的コミュニケーションスキルは、杉山他 (2015) によれば、「心理的スキル」「交差的スキル」「神氣的スキル」「非言語的スキル」から構成され、「心理的スキル」は、患者への説明、確認、指示などの事柄や事実を話すコミュニケーションであり、「交差的スキル」は、患者の反応に対してより深く理解するため質問したり、患者の自己開示を促進させたりする、こころの機能を発動させるための訊くコミュニケーションであり、「神氣的スキル」は、患者の体験やその思いなどのこころの物語を引き出させるコミュニケーションである。

12 藤本 (2013) については、いずれのタイプにも属さないが、20件のうちの1件であることから、Table 3の最後に入れた。

Table 3 ENDCOREsを用いた先行研究の概要（タイプⅢ）

文献	対象者	対象者の年齢	その他の使用尺度	分析内容
戸田・堀・伊藤・對馬・谷利 (2019)	大学生2775名（2017年度1～3年生）、大学生3512名（2018年度1～4年生）	—	社会的考慮尺度、特性的自己効力感尺度、高齢者観調査	ENDCOREsの各因子の得点比較（2018年度2～4年生）、地域関連教育科目の受講者と未受講者でENDCOREsの各因子の得点比較（年度別）、COC活動の参加と不参加でENDCOREsの各因子の得点比較（年度別）
向出（2018）	女子大学短期大学部幼児教育学科1年生143名	—	—	ENDCOREsの表現力、他者受容、関係調整について、ダンスの授業（6回）前後の比較、表現力、他者受容、関係調整のサブスキルについて、ダンスが好き・嫌い×授業前後の2要因分散分析
亀ヶ谷（2017）	女子短大生49名	—	日常生活スキル尺度（大学生版）、改訂出来事インパクト尺度（IES-R）	ENDCOREsの各因子の $\alpha$ 係数、ENDCOREsの各因子の、10週間の構成的グループエンカウンター前後の変化
高井・渡辺（2017）	全9回にわたって実施したアーチェリー教室に定期的に参加した6名（男性3名、女性3名）	53.8±13.3	一過性運動に伴う感情尺度	ENDCOREsの各因子の、各回のアーチェリー教室の実施前後の変化
小笠原（2016）	短期大学保育学科2年生124名（うち男性2名）	—	—	資格必修科目「健康の指導」（隔週通年全15回）の1コマ（90分）の実施前後で、ENDCOREsの各因子の比較、実施前と実施後それぞれで、ENDCOREsの因子間の比較
藤本（2013）	大学生2184名（男性1209名、女性969名、性別不明6名）	19.55±1.64	—	ENDCOREsの各因子の $\alpha$ 係数、共分散構造分析によるENDCOREsの内部構造の検証など

より、授業前はダンスが好き>ダンスが嫌いであったが、授業後にはダンスが好き=ダンスが嫌い、であった。表現力、他者受容、関係調整それぞれの得点が上昇した理由として、向出（2018）は、ダンスの授業におけるコミュニケーションが、身体を通して感情を表現したり、そのイメージに合ったものになりきって思いを込めて表現したりする要素が強いこと、グループで協力しながら特に相手を意識したり動きを共有したりするものであったことを挙げている。また、言語表現、身体表現、情緒伝達における群と時期の交互作用については、ダンスが嫌いな学生が、授業を通してダンスに触れる経験を通して、表現力を身につけた実感が得られたことが、授業後の高い自己評定値につながったのではないかと考察している。

小笠原（2016）では、自己統制（4.54と4.70）、表現力（4.05と4.31）、読解力（4.65と4.82）、自己主張（3.80と4.08）において、「健康の指導」の1コマの実施前よりも実施後のほうが、自己評定値が有意に高くなっていた。

亀ヶ谷（2017）では、10週間に渡って毎週1回（90分間）計10回の構成的グループエンカウターの前後で、自己統制（4.59と4.94）、他者受容（5.22と5.51）、関係調整（4.95と5.40）の自己評定値が有意に高くなった。その理由として、人間関係のスキルを練習する機会や、自己開示ができるようになりレシーョンのついた人間関係を参加者に提供する、構成的グループエンカウンターを体験したためであるとしている。

戸田他（2019）では、2018年度2～4年生について、

1年間の在学によって各メインスキルに違いがあるかを調べた結果、2年生については読解力（4.4と4.5）、他者受容（4.6と4.7）、関係調整（4.4と4.5）、3年生では表現力（4.0と4.1）、自己主張（4.0と4.2）で、自己評定値が有意に高くなっていた。（4年生は2018年度の回答者数が2017年度に比べて37.9%減少しているため、統計的検定は実施されなかった。）地域関連教育科目の受講者と未受講者で、各メインスキルに違いがあるかを調べた結果、2017年度では全てのメインスキルで、2018年度では自己統制と読解力以外のメインスキルで、受講者のほうが自己評定値が高かった<sup>13</sup>。COC活動参加者と不参加者で、各メインスキルに違いがあるかを調べた結果、2017年度では表現力以外のメインスキルで、2018年度では読解力以外のメインスキルで、COC活動参加者のほうが自己評定値が高かった<sup>13</sup>。1年間の在学による自己評定値の上昇の理由として、本学は社会において「不言実行あてになる人間」を建学の精神として教育を展開しており社会の中での自己の位置づけを意識する機会が多いためと思われる、学年進行とともに自己を表現する能力が向上していると思われる、としている。地域関連教育科目の受講者において自己評定値が高かった理由として、地域関連教育科目には受講者自身が自らの考えを整理し、ディスカッションにより考えを深めることや、アクティブ・ラーニングを取り入れた科目が多く存在するため、としている。

13 タイプⅠに関するものである。



高井・渡辺(2017)では、健常者と視覚障がい者が共に実施するアーチェリー教室への継続的な参加に伴って、自己統制、自己主張、他者受容、関係調整の自己評定値が高くなった。

### ENDCOREsを用いた研究の今後の課題

関西地区の男女大学生、大学院生を対象とした倉元・大坊(2012)では、年齢が上がるにつれて自己統制、自己主張の自己評定値が高くなったのに対して、作業療法専攻の大学1~4年生を対象とした千葉他(2017)では、自己主張の中の柔軟性、他者受容の中の共感性、関係調整の中の関係維持、対人スキル、管理系スキルで、3年生ないしは4年生よりも1年生のほうが、自己評定値が高かった。同じ大学生でも医療系大学の大学生の場合には、3年生や4年生における、学外での数週間の臨床実習での、思ったほどうまくできなかったという体験が、「普段のコミュニケーション場面におけるあなたの行動について回答」するよう求められた場合にも、反映されてしまうことを示している。

千葉他(2015)では、他者受容、他者受容の中の友好性、譲歩、他者尊重、関係調整の中の関係重視、関係維持、そして反応系において、学生群のほうが指導者群よりも自己評定値が高かった。千葉他(2015)が考察しているように、普段のコミュニケーション場面について、学生群は日常的に関わりのある親しい相手との、指導者群は患者様や立場の異なる相手とのことを、それぞれ考えて回答した結果と考えることができる。千葉他(2015)は今後の課題の中で、学生群のコミュニケーション・スキルの継時的な変化を見ていくために、(3年生、4年生での)臨床実習経験後、作業療法士・言語聴覚士としての臨床初期、臨床実習指導者となった時期毎に同様の調査をおこなっていく必要があると述べている。このようなかたちで調査を実施することで、例えば臨床実習経験後や臨床初期では自己評定値は低いが、臨床実習指導者となった時には自己評定値は高くなるのか、といったことが検討できる。

戸田他(2019)では地域関連教育科目の受講者と未受講者で、また、COC活動参加者と不参加者で、ENDCOREsの多くのメインスキルの自己評定値に有意差が見られ、地域関連教育科目の受講者、COC活動参加者のほうが自己評定値が高かった。しかしながら、地域関連教育科目の受講者やCOC活動参加者は、元々コミュニケーション・スキルが高く、ディスカッションや、他者との関わりの多い科目、活動に好んで参加した可能性もある。そ

のため、受講者、未受講者(参加者、不参加者)とも、受講(参加)前の時期にも自己評定値を採取し、受講者と未受講者(参加者と不参加者)の間に有意差がないことを確認しておく必要がある。

二本松・若島(2018)、奈良他(2014)、真鍋・當日(2018)では尺度を新たに作成し、その併存的妥当性の検討に、ENDCOREsが使用されていた。二本松・若島(2018)では、攻撃的な笑いへの反応尺度の下位尺度「協調反応」と、ENDCOREsの関係調整、「否定・拒否反応」と、ENDCOREsの表現力、自己主張、「曖昧反応」と、ENDCOREsの自己主張との間に見られた弱い相関に対して、妥当な解釈がおこなわれていた。それに対して真鍋・當日(2018)において、看護師ヒューマンスキル尺度の下位尺度「積極的自己開示」と、ENDCOREsの表現力、自己主張の間に見られた相関に対する解釈は妥当であると考えられるが、それ以外の下位尺度(「知識的組織理解」「協働的問題解決」との相関(特に前者)については、より妥当な解釈が必要であろう。

奈良他(2014)では、ENDCOREsをモデルに、20項目から成る医療コミュニケーション・スキル質問票を作成したにも関わらず、因子の数が3つになっていることに加えて、「患者受容と自己統制」の因子にはENDCOREsの関係調整、他者受容、自己統制の項目が、「患者への適切な説明」の因子にはENDCOREsの自己表現、関係調整、解読力の項目が負荷していた。なぜ、ENDCOREsの因子構造と大きく異なったのか(ENDCOREsの表現力と自己主張を自己表現としてまとめたことや、そもそも質問項目数が20項目と少なかったことなどが関係していると思われる)の説明が必要である。

質問紙法による性格検査である新版TEG IIと、ENDCOREsの関連を検討した松本他(2016)では、CPと、6つのメインスキル、3つの系、NPと、反応系、解読力、他者受容、管理系、関係調整、自己統制、Aと、自己主張、FCと、自己統制以外、ACと、表出系、自己主張、表現力との間に見られた有意な相関に対して、妥当な解釈がおこなわれていた。藤本・大坊(2007)では、同じく質問紙法による性格検査である日本版MPI(外向性と神経症的傾向の2つの性格特性を測定)を用いて、各メインスキルの自己評定値が外向性、神経症的傾向の程度(高・中・低)によってどのように異なるかを検討したが、松本他(2016)は、藤本・大坊(2007)とは異なる視点から、性格特性との関連を見出したといえる。

針本他(2015)では、自己受容尺度の合計得点に、ENDCOREsの自己統制と表現力の影響力が強いことが見出された。この自己受容尺度は、身体的自己項目(例:



体力)、精神的自己項目(例:積極性(自分から進んで行動すること)),社会的自己項目(例:経済状態),役割的自己項目(例:男または女としての自分),全体的自己項目(例:現在の自分)の5つの下位尺度を有し、各項目について5件法(1:それではまったくいやだ、気に入らない~5:それではまったくよい、そのままよい)で回答する(沢崎,1993)。精神的自己項目の中には、他に協調性、忍耐力、指導力など、ENDCOREsの対人スキルに関係する項目もあることから、なぜ、対人スキルの影響力が弱かった(あるいは見られなかった)のかの説明が必要である。

向出(2018)では女子短大生に対するダンスの授業(6回)前後で、小笠原(2016)では短大生に対する「健康の指導」1コマ(90分)の実施前後で、亀ヶ谷(2017)では女子短大生に対する10週間に渡る毎週1回(90分間)計10回の構成的グループエンカウンターの実施前後で、戸田他(2019)では1年間の在学の前後で、そして高井・渡辺(2017)ではアーチェリー教室への参加の前後で、ENDCOREsのメインスキルやサブスキルの自己評定値に有意な差が見られ、後のほうが前よりも自己評定値が高くなっていった。しかしながら、いずれの研究においても統制群が設けられていないため、講義や実習によって、ENDCOREsで測定されるコミュニケーション・スキルがより得意になった(ないしは苦手でなくなった)と結論付けることは難しい。そのため、例えば、選択科目の受講者と未受講者(学部、学科、専攻、年齢が同じであることが望ましい)を調査対象者として、受講者を実験群、未受講者を統制群とした検討や、同一科目で複数のクラスが開講されていればその中の半分のクラスを統制群の調査対象者とした検討が必要である。また、後のあと、期間を空けて再度調査を実施し、自己評定値に変化が見られるのかの検討も必要であろう。さらに、ENDCOREsのメインスキル全てを取り上げるのではなく、例えば講義での到達目標に関係するメインスキルのみを取り上げ、講義実施前後の自己評定値の変化を調べることで、取り上げたメインスキルの向上にその講義が有用であるかを検討することが可能となるであろう。

ENDCOREsは、自己記入式の質問紙によって、その人のコミュニケーション・スキルを測定するものである。前田・佐藤(2018)は、メタ認知機能に困難が見られる対象者は、内省的な自分の認知過程を正確に捉えられず、回答の正確さが低下することが懸念されるため、行動指標や他者評価に基づく客観的な方法によって査定することが望まれるとしている。これに関しては、顔写真からの情動の判断における正答数と共感性尺度の関連

を検討した福井・高藤(1991)や、SKIPIN(社会的スキルトレーニングのための課題:動画に映る対人関係の読み取り)とACTとの関連を検討した上出・大坊・谷口・磯(2008)などを参考にした検討が可能であろう。

今回タイプIIで取り上げた先行研究では、ENDCOREsが、各研究で新しく作成された尺度の併存的妥当性の検討に用いられていたが、大学1、ないし2年生におけるENDCOREsの自己評定値と、臨床実習後の実習指導者による成績との相関係数を算出することで、ENDCOREsの予測的妥当性を検討することも、今後の課題であろう。

## 文 献

- 千葉 さおり・佐藤 彰博・浅田 一彦(2015). 作業療法士・言語聴覚士を目指す学生と臨床実習指導経験者のコミュニケーション・スキルの違いについて 弘前医療福祉大学紀要, 6 (1), 65-72.
- 千葉 さおり・佐藤 彰博・浅田 一彦(2017). 作業療法学専攻学生のコミュニケーション・スキルにおける学年間の差 弘前医療福祉大学紀要, 8 (1), 65-72.
- 大坊 郁夫(1998). しぐさのコミュニケーション——人は親しみをどう伝えあうか——サイエンス社
- 藤本 学(2013). コミュニケーション・スキルの実践的研究に向けたENDCOREモデルの実証的・概念的検討 パーソナリティ研究, 22, 156-167.
- 藤本 学・大坊 郁夫(2007). コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み パーソナリティ研究, 15, 347-361.
- 福井 康之・高藤 美樹(1991). 基本感情の顔面表情からの認知について 愛媛大学教育学部紀要(教育科学), 38, 89-99.
- 針本 謙一・室林 みのり・森 美佳・町田 千代・河口 絵里奈・大場 由香…八塚 美樹(2015). A病院看護師のPNSマインドとコミュニケーション・スキルとの関連——PNSマインドの指標として自己受容尺度を用いて——日本看護学会論文集 ヘルスプロモーション 46, 339-341.
- 平工 志穂・小林 勝法・北 徹朗・中山 正剛・小谷 究(2018). 大学体育実技におけるコミュニケーションスキル・ルーブリックの開発 日本体育学会第69回大会予稿集, 264\_3.
- 岩月 宏泰・木村 直子・文野 住文(2013). 理学療法学生における職業生活意識についての性別及び学年別比較 理学療法学, Supplement2012(0), 48100035.

- 亀ヶ谷 雅彦 (2017). 構成的グループエンカウンター (SGE) がコミュニケーションスキルに及ぼす心理教育的効果——東日本大震災後の短大における実践事例をもとに—— 山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告, 44, 29-42.
- 上出 寛子・大坊 郁夫・谷口 淳一・磯 友輝子 (2008). 非言語的コミュニケーションによる対人関係の解読——社会的スキルとパーソナリティの関連から—— 電子情報通信学会技術研究報告, 108(27), 13-18.
- 倉元 俊輝・大坊 郁夫 (2012). 大学生のコミュニケーション・スキルの特徴に関する研究——ENDCOREsを用いた検討—— 対人社会心理学研究, 12, 149-156.
- 桑原 まさ子・石原 英子・内山 こずえ・小島 佐知子 (2016). A 病院看護師のクリニカル・ラダー別にみるコミュニケーション・スキルの比較——コミュニケーション・スキル尺度 ENDCOREs を使用して—— 日本看護学会第 46 回大会論文集 看護管理, 29-31.
- 前田 由貴子・佐藤 寛 (2018). 大学生における自閉スペクトラム症傾向, メタ認知, コミュニケーション・スキルの関連 関西大学心理学研究, 9, 59-66.
- 真鍋 知香・當目 雅代 (2018). 「看護師ヒューマンスキル尺度」の開発と信頼性・妥当性の検討 日本看護研究学会雑誌, 41, 4\_637-4\_649.
- 松本 真由美・小島 悦子・藤長 すが子・吉田 香・山田 敦士・森口 真衣 (2016). A 大学看護学科 1 年次生のコミュニケーション・スキルに関する研究——エゴグラム, 日常生活スキル尺度, ENDCOREs による分析—— 日本医療大学紀要, 2, 12-22.
- 向出 章子 (2018). ダンスの授業による大学生のコミュニケーション力の変化の検討 学校教育センター年報 (武庫川女子大学), 3, 77-85.
- 奈良 雅之・戸村 多郎・小島 賢久・福田 文彦・中村 真通・藤田 洋輔 (2014). 鍼灸師を対象とした医療コミュニケーション・スキル尺度の開発 全日本鍼灸学会雑誌, 64, 204-211.
- 二本松 直人・若島 孔文 (2018). 攻撃的な笑いへの反応尺度による反応タイプの分類——現代の若者のコミュニケーション支援を目指して—— 笑い学研究, 25, 72-89.
- 小笠原 大輔 (2016). 保育者養成課程における「つながりあそび」の実践報告 湘北紀要 (湘北短期大学), 37, 71-84.
- 沢崎 達夫 (1993). 自己受容に関する研究 (1) ——新しい自己受容測定尺度の青年期における信頼性と妥当性の検討—— カウンセリング研究, 26, 29-37.
- 杉山 由香里・比嘉 勇人・田中 いずみ・山田 恵子 (2015). 看護師の援助的コミュニケーションスキルと私的スピリチュアリティおよび共感性の関連 富山大学看護学会誌, 15, 17-27.
- 橘 幸子 (2014). PNS の特徴とパートナーシップ・マインド 看護管理, 24, 820-824.
- 高井 秀明・渡辺 一志 (2017). アーチェリー教室への継続的な参加に伴う健常者・視覚障がい者の心理的变化 日本体育学会第 68 回大会予稿集, 119\_3.
- 戸田 香・堀 文子・伊藤 守弘・對馬 明・谷利 美希 (2019). アンケート調査による中部大学 COC 事業とその教育効果の検討 生命健康科学研究所紀要 (中部大学), 15, 31-38.
- 余語 真夫 (1999). コミュニケーションスキル訓練 中島 義明・子安 増生・繁樹 算男・箱田 裕司・安藤 清志・坂野 雄二・立花 政夫 (編) 心理学辞典 (p. 278) 有斐閣